

「患者中心の継続看護における外来看護の役割 その2」

看護学科 武藤稲子

1 はじめに

周手術期にある患者は、手術までの日数が短期化したことに伴い術前準備を自宅で行わなくてはならない。また、術後の体調管理を退院後に自宅で行うケースが多くなってきている。このような患者に対して、看護師は十分な配慮をおこなう必要がある。

これまでの研究結果では、看護師の患者に求める自己管理への期待と看護師が実施する指導内容とにずれがあることがわかった。外来受診時の患者の声も「看護師に聞きたいことがあるが忙しそうで聞きにくい」、「医師に聞いたから看護師に聞くことはない」と、看護師に聞けば解決しそうな日常生活のちょっとしたことを聞いていない結果であった。そこで、外来と病棟との継続した患者へのケアが実施されているのか実態を調査し、患者中心の継続看護における外来看護の役割について一考察する。

2 研究の方法

1) 対象

クリティカルパス適応の患者とその家族

2) 方法

- (1)協力を得られた病院の外科病棟にクリティカルパス適応で入院され、退院を迎える患者及び家族に面接し、研究の目的を文章で提示し口頭で説明を行い、承諾を得る。
- (2)協力を得られた外科病棟の看護師長の援助を得て外来日時を検索する。
- (3)退院後、初回外来受診日に外来において診察の待ち時間に患者及び家族に面接し、退院後の日常生活に関する内容や外来に対する意見を聞き取りし記述する。
- (4)分析する。

3) 倫理上の配慮

(1)質問紙の内容に関して

調査紙に関しては、病院・病棟と検討し作成した。

内容については、病院と話し合いのもと、倫理上の配慮を行った。

(2)患者の協力に対して

調査をするにあたり、事前に了解された患者を対象とした。また、調査協力にあたり、療養上の妨げにはならないことを文章で示し口頭で説明した。

- 4) 自己効力 8 項目についての質問は、独自に作成する。
- (1) 入院中の退院指導は、家で生活する上で役に立ったと思う
 - (2) 指導の内容を実際に取り入れて生活したものもある
 - (3) 退院後のために、入院中に色々なところから情報収集した
 - (4) 退院後の生活を快適に過ごすために、自分なりの目標を立てた
 - (5) 目標達成のために、自分なりに努力した
 - (6) 生活する上で、何か問題に直面した時は、どこが難しいかを分析したり、考えたりするほうである
 - (7) 今後のことなど、あまりくよくよ考えないほうである
 - (8) 気持ちが進まないことをする時には、そのことの良い面や終わったあとのことを考えるほうである

3 研究結果

クリティカルパス適応の患者とその家族 13 組から結果を得られた。

年齢は、30 歳代から 80 歳代までであった。

	役立つ	実際	情報収集	目標設定	努力	問題分析	今後	良い面
役立つ								
実際	.826 **							
情報収集	.330	.400						
目標設定	.440	.300	.050					
努力	.284	.194	-.194	.645 *				
問題分析	.522	.316	.316	.316	.408			
今後	-.213	.194	.258	.194	-.167	-.408		
良い面	-.080	.073	-.073	-.181	.047	-.459	.047	

表 1 自己効力の相関係数 (**相関係数は 1%水準で有意、*相関係数は 5%水準で有意)

自己効力 8 項目では、年代と自己効力との有意な差は見られなかった。自己効力の項目間では、「入院中の退院指導は、家で役に立ったと思う」と「指導の内容を実際に取り入れて生活したものもある」の間(.826**),「退院後の生活を快適に過ごすために、自分なりの目標を立てた」と「目標達成のために、自分なりに努力した」の間(.645*)に相関関係が見られた。

また、自由記述項目で心配事についてないと言う方が多かった。会話をする中で「食事が少しになって落ち込んだ」、「痛みのこと、仕事復帰のこと」など自宅での生活を思い出し心配なことや看護師に聞きたいことなど、少しずつ内容が明らかになった。

看護師に聞きたいことでは、「別にない」が最も多く、「風呂に入ってよいのか」「食べた後について」「食事内容について」であった。

4 考察

表1より、看護師からの入院中の退院指導は退院後の生活に役に立ち、指導内容を実際に実施している。患者は、看護師の指導を聞き入れ退院後の自己管理を積極的に行っている。それぞれの患者にあった十分な説明がされることで、入院中の指導は退院後の生活を支える上で重要である。

退院後の生活において目標を持つことが努力につながっていると考えられる。自己管理を効果的に行うためには、それぞれにあった目標設定が大切である。それは与えられたものではなく患者自身が家庭を考慮した自己目標でなければならない。「自分なり」の目標を持つことにより努力することができる。

以上より患者の自己管理に対しての援助として、病棟における患者にあった指導の重要性と患者自身の自己目標設定が必要である。そのことが患者の自己効力感を高め、積極的な行動に移ることができる。

また自由記述では、「別にない」との回答が多かった。医師には検査結果(細胞診の結果)や日常生活について聞きたいとあり、患者の中で外来と病棟とを区別していると考えられる。病棟では何でも看護師に聞くことができる。それは、検温時であったり、指導の場面であったり、直接接する機会が多いからである。外来では廊下での看護師の姿は垣間見る程度であり、廊下にはいないことが当たり前との認識があるのではないだろうか、看護師に聞くことを考えていない。「別にない」がそれを裏付けている。患者は医療者から聞かれることで、思いや気になることを話すことができている。看護師が退院後の患者や新患には話を聞く時間を取る努力をすると、待ち時間の活用ができ待ち時間の短縮にもつながる。また、患者の満足度にも影響すると考える。

5 おわりに

看護に求められる患者の要求が少しではあるが理解することができた。外来という多忙な中で、患者への満足や質に対するケアが届きにくい。だからこそ、病棟からの継続した看護が重要であり、外来看護をさらに発展・充実させていく必要がある。今後、このデータを素に記述とデータをそれぞれに分析し因果関係などを明らかにしていきたい。